南方（その他）

西部ニューギニア・ハルマヘラ島の建築中隊

佐賀県　峰松嘉哉

私は大正十一年一月二十日、長崎県北高来郡小長井町、地主の次男として生まれ、後、田川姓を名乗りまして、昭和十八年三月、長崎高等商業学校の第三十六回生として卒業の予定でしたが、大東亜戦争勃発後の戦時中のため、半年程繰り上げて昭和十七年九月に卒業し、ただちに十月一日、現役兵として歩兵第一四六連隊（久留米）補充隊に入営しました。歩兵としての初年兵教育一期検閲終了して昭和十八年三月十日、一等兵の階級を与えられ、兵科幹部候補生を命じられました。

四月一日、上等兵の階級に進み、甲種幹部候補生を命ぜられました。甲幹は学校教練で将校適の者で、官立の長崎高商での教育は厳格であったためか、ほとんどが甲幹に合格したようでした。

一ヵ月余りは原隊の久留米連隊で教育を受け、五月十日、久留米第一予備士官学校に入校しました。今までの陸軍の教育は対ソ戦法が主であり、極端な表現をすれば、横並び、即ち横に散開して戦う戦法でありました。ところが、我々の入った頃は、南方等での戦線では「ジャングル内での戦法」となり、縦並びの隊形での作戦・訓練と大変化をしていました。学校教練では横形隊形でしたから、当面は面食らった思いでした

が、南方での実戦教訓により、歩兵操典も新たに書き替えられなければならなくなったのでありましょう。

小銃も三八式から九九式となり、銃の長さは若干短くなりましたが、口径は大きくなり、重機関銃と同じ口径になったのです。私は、高商出で、経理が専門でしたから、経理将校になるべく、経理学校行きを志願したところ教官から「経理部とはけしからん。お前は体格も良いのだから第一線の小隊長をやれ」と大変怒られました。そのためか高商の仲間は一人も経理学校には行けませんでした。

体の丈夫な者は第一線の消耗品将校（中・小隊長）となれというのでありました。体の大きい者は重機関銃隊や歩兵砲隊へ行きました。我々は、久留米予備士官学校の側の赤土の大きな演習場で、暑さの中を、歩兵小隊長としての訓練を受けました。

八月一日、伍長の階級に進みました（任官ではなく、卒業までは階級を与えられるわけで、万一事故や学校中退とでもなれば、この階級は返納し、再び兵の階級に下げられる）。伍長になるまでは、兵隊としての基礎、実地訓練で、兵の体力と兵としての実技、分隊長としての教育が厳しく行われますので、酷暑の中での訓練に耐えつつの毎日でありました。

十月一日付けで、軍曹の階級に進みましたが、階級章には金筋一本、星二つと、一般なら押しも押されぬ班長殿であるわけですが、学校では初年兵同様の訓練が続けられ、その頃からは小隊教練・中隊教練の中で、小・中隊長として指揮者の訓練へと進んでいくのであります。

入営以来一カ年間で、如何に厳しい訓練を受けたとはいえ、部下には助教として自分を教えてくれたような、古参や歴戦の下士官を分隊長とし、古参兵や初年兵、現役兵や補充兵等種々な隊員の命を預かる指揮官となるのですから、その責任の重大さを感じつつ、小隊長としての教育を受けているわけであります。

昭和十八年十二月二十四日、予備士官学校を無事卒業し、曹長の階級に進み見習士官を命ぜられました。これから、いよいよ軍刀を下げた将校の見習いとして、翌二十五日大村の原隊へ復帰をしました。昭和十九年

一月十三日、将校勤務を命ぜられ、士官としての任務と責任が付与されたのであります。

翌二月十日、仲間四、五人と共に、ジャワ島（当時の蘭領印度支那）の第十六軍司令部に転属命令が出ました。昭和十八年春というと、南方各地において戦線は縮小、撤退が始まりつつある時期であります。我々も、いよいよ第一線小隊長、司令部付将校としての門出であります。

三月八日門司港出帆、十六日台湾高雄へ上陸、二十四日高雄出帆、四月一日仏領印度支那西貢（サイゴン）（現ホーチミン市）上陸、同八日西貢港出発、同九日仏印プノンペン上陸、同十四日プノンペン出発と、船を乗り継ぎ、乗り継ぎ、ようやく翌十五日、仏印・泰境（タイ）を汽車で通過しました。昭和十九年春ともなると、制海・空権は連合軍側に移り、船での航行は危険度が増していましたし、また、船腹の関係もあってか門司出港四十余日で泰国に入ることができたのです。

四月十六日、泰バンコクへ着、二十八日泰馬来（マライ）（マレー）国境通過し、昭南（シンガポール）着は四月二十九日、天長節の住き日でありました。まさに、五十日間、遥けくもシンガポールに来ることができたと心中思いました。軍司令部のはからいか、五月一日、戦闘機に乗りジャワへ行くということになり、運が良かったのか、軍の手配が良かったのか、戦闘機の後部席に乗せてもらい、ジャワのジャカルタ飛行場に着陸したのです。一カ月間は、現地で、現地人の陸軍士官学校に配属され、現地兵の教育をしました。

六月一日になり、予想もしなかった建築勤務第三十六中隊に転属を命ぜられ、二十日ジャカルタ出発、二十二日スラバヤ着、三十日ダバオ、メナド経由スラバヤ港出発でした。しかし、同日現役満期となり見習士官から陸軍少尉に任じられ、一人前の将校となると同時に予備役に編入され、引き続き臨時召集となり、身分は変わりましたが、先の転属命令の如く、建築勤務第三十六中隊付に補せられたのであります。七月二十日、同中隊のあるモルッカ諸島ハルマヘラ島（西部ニューギニア）上陸、同隊へ着任したのです。

任官の件が判ったのは、後に軍歴を調べたら、その

ように書かれていたからであります。従って、ハルマヘラへ着任したときは、少尉に任官していることなど知らなかったし、私は見習士官（曹長）の服装で最後までいました。俸給は現地では貰っておらず、内地の留守宅へも送金されていませんでした。もっともハルマヘラでは現地自活ですから金を使うところもありませんでした。ハルマヘラには米も何もなかったのです。

七月二十日、建築勤務第三十六中隊付となったのですが、補給廠があり、経理将校もいました。そこは兵站基地であるので粉味噌もあり、缶詰を将校からこっそり貰ったこともありましたが、米は食べていません。台湾からのさつま芋の苗を植え、靴下を解いた糸で網を作り、一個小隊で海に入り魚をとり、芋と魚と現地に生えていた丸い葉をした雑草を炊いて食事をしました。また椰子の実で、椰子油、椰子酒を作りました。椰子の実の水を煮て酵母菌麹で椰子酒を作るのですが、誰が教えたのでしょうか。

建築隊であるので、家を建てるのはお手のもの、建築関係の者、男ばかりの長い生活のゆえ、気持ちも心もすさんできて喧嘩をしたりしていました。その間にも米軍機は近い処のモロタイ島を爆撃に来て、その帰りに置き土産に爆弾を落して行くのです。

沖縄戦の頃ゆえ、米軍機は、「沖縄はやった」「今度は本土だ」などと書いてあるビラを撒いていきました。島には現地人はいましたが、逃げてしまっていて、一年間は、トカゲが木に登っているのを撃ち落して食べました。犬も食べ、ネズミや蛇も食べていました。ニシキヘビは一個小隊でとり、輪切りにして食べるのですが、一匹で一個小隊の食料（タンパク質源）になりました。

私は何でも食べましたから栄養は取れましたが、食べない者は栄養失調になったり、マラリアにかかり、約一〇パーセントくらいの人が亡くなりましたが、亡くなった人は全部戦死扱いとしました。このような場所でこのような状況下での死亡であるから、戦死とするのは当然でありました。

連合行軍の空襲は激烈を極めました。防空壕といっても蛸壺であり、そこへ銃撃をし、更に爆弾を落すと。

しかも絨毯爆撃です。それでも案外死なないものです。本当の占領はやはり歩兵が占領しないと駄目なことがはっきり判りました。軍歌「歩兵の本領」にある如くに。

戦死者は埋めて墓標を建てます。毎日の爆撃で墓地でも墓標を目標にして銃撃してきます。墓標のそばに伏せていて、本人は死なぬのに墓標が二つに割れたこともあります。その墓に埋まった人は二度弾丸に当たったことになるのだから、余程運が悪かったのです。一方、そばに避難して助かった兵隊は余程運が良かったのです。何センチか離れていたら、その人も死んでいるのですから。軍隊は文字通り運隊であることを実感しました。

建築勤務中隊は職人の集合隊で、年配者で三〇歳代以上の妻帯者が多く、随分荒れているので余暇には余興をして時を過ごさせていました。

対岸のモロタイ島の飛行場はとうに使えなくなっていました。モロタイ島へ米軍が上陸した時は米軍機がハルマヘラ島上空を旋回しているので、「これはハルマヘラにいよいよ上陸か」と思い蛸壺陣地で対戦する準備をしていました。我々の所は、補給部隊ばかりの兵站基地で海軍も撤退してしまったので我々戦闘部隊でない者が島を守る覚悟で、日々決戦の準備をしていたのです。米軍の銃爆撃は依然として続いていましたが、幸いなことに我が基地には艦砲射撃は無かったのです。

第三十二師団（楓兵団）がハルマヘラにいたことは戦後知ったので、同師団との交流は無かったような気がします。我が隊は建築隊ですから、大部分が大工や土工で兵隊としての教育を受けていない職人集団であり、私は建築の技術でなく、大工をたばねる小隊長であり、独身で二十三歳の、隊でただ一人の九州人でありました。空襲があっても私は外で飛行機を見ていると「九州の人は違う」と敬意を表されました。こちらは、どうせ死ぬのだと覚悟しており、また自分で命を捨てる気でなければ、兵隊の命は預かれません。

私は本来ビルマへ行くはずでしたが、当時既にインパール作戦も終わろうとしていた時でしたので、もし

行っていれば当然死んだ身だったのです。建築中隊は大部分が群馬出身の気が荒い大工集団で、九州も気が荒いが北関東も気が荒く、しかし、軍隊だから私を大事にして「隊長、隊長」と言ってくれました。中隊長も群馬の人、大隊長は沖縄の人で特別志願の人でしたから、沖縄玉砕で随分落ち込んでいましたが、故郷へ帰られたか、その後は判っていません。

終戦は、米軍が撒いたビラ等で自然と分かりました。初めはビラを拾うなと言っていたのですが、そのビラによって終戦の状況を詳細に知ったようなわけです。武装解除については後に知らされ「武器を何処其所に集めておけ」というだけで、接収後の豪州兵も見たことはありませんでした。ハルマヘラ出帆までは、米軍が上陸してこないばかりか食料も来ず、自分らの自活生活は従来と何ら変わることはありませんでした。

終戦前の七月二十日、我々は独立歩兵第七七三大隊に編入され、私は隊付きとなり、建築中隊は歩兵の戦闘部隊となったわけでありますが、実際には現駐地で対米上陸戦準備をしていたのです。終戦になっても私は兵隊を可愛がっていたので兵隊も私を大事にしてくれました。

引き揚げは、日本の船が来て我々だけ乗ったのですが、今後どうなるのか、どこへ行くのかの情報も命令もありません。「どうせ我々は負けたのだからオーストラリアなどで苦役に使われるのだろう」と言いながら、その覚悟でいました。しかし、着いた所は和歌山県の田辺港で、上陸まで情報は知りませんでした。ただ乗船したら階級章も取ってしまいました。

私の伝令だった中沢上等兵は病気で亡くなったので、帰国してから群馬県の実家を訪ねたのですが、ご両親は泣いて「貴方が連れて帰ってくれたら……」と言われ、そのお気持を察して私ももらい泣きしたものです。我々の中隊は、年配の群馬県出身者のため十年ぐらい前までは、中隊の番号をとって「三六会」という戦友会があり、私も群馬まで行きました。

私と彼等とは歳が十歳も違いましたが「小隊長殿」と言われ、辛ければ辛かった程想い出は強いもので、当時の話を懐かしがったものです。しかし、こういう

話をしても息子も妻も関心を持たぬので、家ではあまり話をしておりません。また、戦友会でも「誰誰が亡くなった」との情報も来ますが、この頃は年賀状も年と共に少なくなってきました。しかし、当時の状況や労苦は、後世まで伝えられることに意義があると思います。

ルソン、仏印無線通信隊

福岡県　橋　川　篤　美

私は福岡県行橋市入覚七三一で生まれ育ち、祖父、父母、長男の私、弟四人、妹三人の大家族であった。しかし、当時は三世帯家族、子供の多いのは普通の構成であった。大正十年三月八日生まれなので昭和十六年徴集者として兵隊検査を受けたが第二乙種、それが第一乙種に編入された。

昭和十七年六月十二日、教育召集令状が届けられ西部第五三部隊へ入隊したら、無線通信隊だった。従って一般歩兵教育はほとんどなく、銃剣術は防具を付けて「前へ、後へ」とのほんの初歩だけ。射撃は実弾五発射っただけ。使役もなく、ひたすらに無線の技術だけで、通信を受ける、打つだけ。それを打つのは一分間に八〇字、受けるのは一〇〇字を出せるように猛訓練された。肉体的な教練はないのだが、暑い最中、講堂に約一二〇人がいて教育を受けました。暑いので眠くはなるし、汗はダラダラ顔から垂れるから、通信紙へ書いた数字がベロベロになり、教官から椅子で頭を叩かれる。

内務班に帰れば古兵から「お前達は昼間楽をしているから」と叩かれる。自分では納得出来ない、連帯責任だと叩かれる。しかし、可愛想に思ってくれる古兵もいて、内緒で菓子を食わせてくれた時は、本当に嬉しく今でも忘れられません。きつくされた兵隊、優しくしてくれた兵隊、ともに忘れられない。

内務班には有線兵もいて、馬も三頭いたから厩当番もした。家には耕作用の牛を飼っていたが、馬を扱ったこともなく、噛む、蹴る、癖の悪いのもいるからこ